**視点と主体のポジション配置**

小熊　和郎（西南学院大学）

　発話文の中で文法・語彙単位がもつ意味と制約を通じて，主体（話者S，共話者S'，行為主体Xなど）がどのような動的，複合的視点をもつかという事例を提示したい．確かに「言語には視点がはりついている」が，「誰」の「何」についての「どのような」視点なのかという３点セットで問題の一端を提示してみる．発表者の関心は，具体的なマーカーの示す複数の「視点」の間にある揺れや動態をどのような概念によって有効に捉えるかにある．

　基本的スキーマとして，「（ある主体のある対象についての）視点」が選択する値をpと置けば，排除される値p'，選択が可能となる分岐点 (p, p') の三つのポジションが想定される．言語マーカーが取るポジションの基本構図から出発し，発話文解釈のバリエーションを総合的に検討することになる．大まかに言えば，SはS'の立場を意識する（同意する，距離をとる）あるいは中立的（無関心）という態度が可能であろう．たとえば p が実現される（あるいは文脈から推測される）が主体はp' を望ましいとする，現実には (p, p') だが pが志向される，選択したp をあらためて (p, p') から確認する，いきなり想定外の p が実現される，pを想定していたがp'になったなど，様々なポジション取りが考えられる．ポジションは異なる主体間でずれたり重なったりするばかりでなく，同一主体内での移動も排除されない．

　発表で取りあげたい現象は，(1)主体の「同化」と「異化」のプロセスが問題になる日本語の終助詞ネ，ヨ，ヨネ，(2) source / path oriented verbである行ク（aller, go）の「過程志向性」とgoal oriented verbの来ル（venir, come）の「結果志向性」，(3) 全く違う領域の問題である(1) (2) の間にある類似点などで，主体の動的ポジション配置が意味の安定性と多様性を支えているという仮説を示したい．(1) に関しては，終助詞の出現が義務か任意か，音調が上がるか平板か，単音か長音かなども複合的な解釈要因になる．(2) は直観的に看取される遠心 / 求心の動きをもとに，空間用法，時間用法，モダリティ用法の間にどのような架け橋が可能かという点が追求すべき問題となろう．